

聖光学院高校野球部と言えば、今では甲子園の常連校である。ここには、県外からも多くの選手が入ってくる。あまり知られていないが、スカウト活動はしていない。そのためか、高校時代に話題になるようなすごい選手というのは、ほとんどいない。だが、ここ数年、聖光学院高校野球部を出て、その後の活躍が認められ、プロに進む選手が出てきた。

その一人が、阪神タイガースの湯浅京己選手である。今年3月に開催されたWBC2023で侍ジャパンに選出され、リリーフ投手として活躍し、優勝に貢献した。それまでは、申し訳ないが、湯浅選手が聖光学院高校野球部出身であることを知らなかった。

湯浅選手は、聖光学院高校ナインに憧れ、三重県尾鷲市の中学校から聖光学院高校野球部に進んだ。しかし、成長痛による腰の痛みで入学直後から練習ができず、1年半もの間、マネージャーを経験した。横山博英部長の野球にふれさせたいとの計らいからだった。本人は複雑な思いだっただろう。「野球がしたくてこの学校にきたので、マネージャーはやりたくなかった。いろいろ考えて、治ったときに選手復帰させてもらえるならやりますと答えました」と湯浅選手は言っている。

体がある程度成長すれば痛みはなくなる。それまでは自分にできることをやろう。試合のスコア書きや練習の合間に食べる食事用の米とぎなど、チームのためにあらゆることをした。外から野球を見たことで収穫があった。

高校2年生の秋、新チームに移るタイミングで練習に復帰できた。野手として入学したが、卒業まで1年あまりしかない。部活動ができる期間は短い。以前経験したことがある投手への思いは捨てていなかった。後悔しない選択をしたい。出した答えは、投手への挑戦だった。自ら斎藤智也監督に願い出た。

斎藤監督は、湯浅選手が投手として投げる姿を初めて見たとき、「ものになる」と感じた。湯浅選手は、それまでの時間を取り戻すように全力で練習に励んだ。高校3年生の春に公式戦デビューを果たした。高校最後の夏は、福島県大会に投手として出場した。この頃になると、球速はチーム最速の145キロをマークしていた。

しかし甲子園ではベンチを外れた。このままでは終われない。1年でNPB入りできる独立リーグ・富山GRNサンダーバーズに入団し、すぐにローテーション入りを果たした。そして、その年のドラフト会議で阪神に指名された。

斎藤監督は、「ひたむきで謙虚な好青年が、人がしない経験を耐えてここまで活躍するようになった。あとはけがさえしなければ」と温かく見守る。湯浅選手は、痛み、けがなどの数々の困難を乗り越え、自分の力に変えた。これだけの不遇の時間を高校生で乗り越えていくのは、並大抵の精神力ではむずかしいだろう。湯浅選手は、何をもっていったのか。それが「信念」ではないか。信念をもって自分の道を進む強い心である。

聖光学院高校野球部から直接プロの道に進むのは素晴らしいことである。だが、高校卒業後に、さらに力をつけ湯浅選手のようにプロの世界に入るのも、非常に価値のあることである。聖光学院高校野球部は、野球という競技を通じて、人を育成しているように思えてならない。